３年間の研究の総括

研究を終えて

３年間 ICT 機器を活用した授業や支援方法について学校全体で取り組み、情報機器を操作することに対する意識を向上させると共に、その使用方法や教材としてどのように活用することができるのかについて検討を行ってきた。

初年度は、各授業で ICT 機器を取り入れる中で、授業のどの場面で活用しやすいのか、使ってみて感じた効果と課題が浮き彫りとなり、ICT 機器の効果的な使い方を考える１年となった。また、情報処理能力とは何かを全体講義の中で確認し、なぜ ICT 機器の活用がこれからの教育現場において求められるのかを全校で共有することができた。

２年めは、初年度を経て場面を絞った指導の中に ICT 機器を活用した支援方法を探り、実践した。ここでは、教員が ICT 機器を活用した教材を作成し共有することで、ICT 機器が適している場面や状況を確認することができ、今後支援方法を検討するうえでの手がかりとなった。また、タブレット型端末の活用方法や利用したアプリの紹介を行うことで、教員の ICT 機器の活用の幅も広がったのではないかと考えられる。

その一方で、ICT 機器を活用することで分かってきたデメリットもあり、教員の中からは ICT 機器を活用しない方法が良いとされる意見が上がることもあった。ネット環境によって接続がうまくいかず間が空いてしまう、児童生徒がタブレット型端末に執着してしまう、などといった課題もあり、従来の実物を用いたアナログの教材の良さも分かった。場面に応じて、ICT 機器とそれ以外の教材を使い分けることが必要であることを実践していく中で改めて確認することができた。

そして３年目には、児童生徒一人ひとりに対する支援の中に ICT 機器を活用することを検討し、実践した。これまでの研究によって得た ICT 機器に関する知識を活用して、適するアプリを検索したりアプリ内の機能を工夫したりして支援方法を実践できたグループが多くあった。一方で、ICT 機器を手立てとしない方が児童生徒に合っていることが分かり、実践の方向性を変えたグループもあった。また、これまでは ICT 機器を使用していたが、今後へ向けて ICT 機器の支援が無くても取り組んでいけるように、少しずつ ICT 機器を無くしていくような取り組みをするグループも見られた。

授業、学校生活の一場面、児童生徒、それぞれに焦点を当てて実践していく中で、共通してICT機器が効果的である部分と、逆効果となってしまう部分があり、状況に応じて使い分ける必要があることが分かった。教員のICT機器を活用するための意識やスキルは向上したが、支援学校に通う児童生徒がICT機器を活用していくための指導法や、ルール作りについて深めるところには至らず、課題が残る。

今後の展望

R5 年度で３年間の本研究を終えるが、今後さらに情報化が進んでいく中でこれから個人で ICT 機器を活用した指導や、ICT機器を児童生徒が活用するための指導の取組みを進めていかなければならない。今回の研究で挙がったメリットをうまく利用し、教員が自分なりに工夫した活用方法を見出すことができれば、それは今回の研究の成果と言えるだろう。これまでのICT機器を使用することに対する敷居が少しでも低くなっていることを期待したい。また、この３年間の中で、情報機器も充実し、1年目には ICT 機器が不足していることが課題として挙げられていたが、2年め以降は情報部と連携し、モニターやプロジェクターの購入、AppleTV の常設など、環境も整ってきており、今後ますます情報機器を利用しやすくなっていくのではないだろうか。その中でデジタルとアナログを使い分け、これまで同様に児童生徒に合った教材、教具を選択し、引き続きより良い支援の方法を模索し続けていきたい。また、子どもたちが情報社会の中でよりよく生きていくためのデジタルシティズンシップ、情報モラルについての学習を系統的に行っていくことも今後の課題として挙げられる。